

## 大血管転位症手術予後調査

大阪大学第一外科 川 島 康 生  
秦 石 賢

1976年以前の TGA 症例中、遠隔期生存例は9例である。そのうち、遠隔死亡1例を除く8例にアンケートを発送し、全例より回答を得た。手術時年齢は7カ月～7才、平均2才1カ月。調査時年齢は3才4カ月～15才2カ月、平均6才4カ月。術後追跡期間は、2年7カ月～7年6カ月、平均4年2カ月であった。男5例、女3例。Mustard 分類では、I型5例、II型2例、III型1例。I型、III例は全例 Mustard 手術を行い、III型では VSD 閉鎖、PS 除去を行った。II型の2例中、1例は、高肺血管抵抗の為、Palliative Mustard 手術を行い、他の1例には、Jatene 手術を行った。Mustard 手術時、baffle は心外膜を使用、又、冠静脈洞は、2例で、機能的右房に、5例で、機能的左房に、開口せしめた。

8例中1例で、下大静脈脱血管挿入部、及び、その近傍の baffle の狭窄の為、下大静脈還流障害をきたし、術後4カ月目に再手術を施行。その後は、順調に経過した。又、今回アンケートを発送しなかった。遠隔死亡例1例は、baffle の狭窄により、上大静脈還流障害をきたし、術後1年で死亡した例である。1例で Mustard 手術後、左肺静脈還流障害が疑われたが、特に臨床症状はない、2例で、術中長時間の循環停止、或いは、術後の心停止の為、術後脳障害をきたした。心電図では、術前、全例 Sinus rhyshm、遠隔時 Sinus rhyshm 7例 junctional

rhyshm 1例と変化した。又、VSD を閉鎖した TGA II型例1例で、術後 CRBBB を認めた。動脈血酸素飽和度 (SaO<sub>2</sub>) の変化をみると、BAS 施行例5例 (I型4例、II型1例) では、BAS により、平均40.7%から55.7%と15%の上昇をみ、更に遠隔時には、92.3%と上昇した。BAS 非施行例2例 (I型1例、II型1例) も含め、total 7例では、術前52.1%より、術後91.9%と上昇した。Hb 値の変化では、術前、全例 15g/dl 以上、平均 18.5 g/dl より、遠隔時・全例 15 g/dl 以下、平均12.2 g/dl であった。

以下、アンケート結果をまとめると、次の如くである。体重、身長では、男子例2例を除く全例で、平均±2SD 以内にあり、発育はほぼ順調である。運動能力、チアノーゼは、全例、著明に改善された。又、知能の発達、或いは、精神的発育では、術後脳障害の2例を除き、順調である。NYHA 分類では、全例、術後 I° で、生活している。現在の症状では、8例中、症状なし5例、症状あり3例であった。その主な症状は、風邪にかかりやすいであった。手術の効果では8例中7例で、よくなったと答えた。退院後の病気で、血清肝炎は2例(25%)にみられた。退院後の治療薬では、全例、ジギタリス剤、利尿剤等は、服用してなかった。

## 完全大血管転位症 Mustard 手術の遠隔期成績

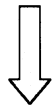
東京女子医科大学 心臓血圧研究所 高尾 篤 良 門 間 和 夫

完全大血管転位症の Mustard 手術後遠隔期予後は必ずしも良くなく、死亡例・各種の不整脈・心機能不全が報告されている。本法の遠隔期予後を知り、手術法を改善することを目的としてこの研究を行なった。

### 〈方 法〉

1969年より1976年に Mustard 法による心内修復手術

を受け生存退院した完全大血管転位症20例を対象とし、入院・外来病歴と調査表郵送により、手術後2年—9年の状態を調査した。病型はI型15例、II型4例、III型1例、手術年齢は3ヶ月ないし4歳、心房内 baffle は心外膜 (15例) 又は goretex (5例) を用い、II、III型では VSD を patch で閉鎖した。14例で手術後2週間な



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



1976年以前のTGA症例中,遠隔期生存例は9例である。そのうち,遠隔死亡1例を除く8例にアンケートを送信し,全例より回答を得た。手術時年齢は7ヵ月~7才,平均2才1ヵ月。調査時年齢は3才4ヵ月~15才2ヵ月,平均6才4ヵ月。術後追跡期間は,2年7ヵ月~7年6ヵ月,平均4年2ヵ月であった。